

# マン兄弟の確執 — 1903～05年 —

(その 8)

## 三 浦 淳

### IX. トーマス・マンの結婚とハインリヒ・マン (承前)

#### (4) イーネス・シュミート

以上のように、ハインリヒ・マンは弟トーマスが作家として名を上げカチアと結婚したことを契機として、自分自身の生き方を全面的に見直し、新しい方向性を確立してそれを文学的に宣言した。しかしフローベール・エッセイは理論に過ぎなかった。トーマスにとって、『トーニオ・クレーガー』で「私は生を愛する」と宣言した結果がカチアとの結婚であったように、ハインリヒの実生活にも愛するべきパートナーが欠けていた。ここに登場したのがイーネス・シュミート Ines Schmied である。彼女はハインリヒがのちに婚約者と称することになる女性で、結局結婚はしないまま1910年頃に別れているが、<sup>(95)</sup>ともかくも数年間ステディな関係を保っている。

イーネスは1883年生まれだからハインリヒより12歳年下、ドイツからアルゼンチンに移住した農園所有者の娘で、母及び文学者である兄と一緒にヨーロッパを旅行していた。大変な美人で奔放な性格であり、歌手か女優になりたいと考えていた。<sup>(96)</sup>

二人が出会った場所はフィレンツェで、1905年のことである。しかし何月かまでは判然としていなかったため、ハインリヒがトーマスの結婚式に来なかったのは彼女と知り合って離れたくなかったからだという説が Mendelssohn により提唱され、若干の研究者に無批判的に受け入れられていることは先に述べた (IX(2)を参照)。

この説への批判を以下で述べよう。トーマスの結婚式は1905年2月11日であるから、もしこの説が正しいとすると二人は遅くとも2月初めには知り合っ

いなくてはならない。しかし現在の資料からするとその可能性は小さいと言わざるを得ないのである。トーマスと違ってハインリヒは（東独に著作権があったこともあって）書簡類が余り公刊されておらず、その行動の具体的な事実関係に案外不明な点が多かった。しかしドイツ統一以降、旧東ベルリンにあるハインリヒ・マン・アルヒーフの資料をもとにした研究書が少しずつ出るようになった。その一冊、1993年に出た Ariane Martin の初期ハインリヒ・マン論 „Erotische Politik“ によれば、ハインリヒがイーネスと知り合ったのは1905年の3月だったという。<sup>(97)</sup>ただし Martin はそう述べていながら論拠を示していない。それで私は直接 Martin に手紙を書き、論拠を問いただした。Martin からはすぐ丁寧な返答が届いた。

Martin の説明は要約次のとおりである。現存している最初のイーネスのハインリヒ宛ての郵便は1905年4月2日付け絵葉書であり、ミラノからフィレンツェ宛てで、内容は簡単な挨拶だけである。同じくハインリヒからイーネス宛ての最初の手紙は4月11日付けで、内容はまださほど親密な関係を暗示していない („Verehrtes gnädiges Fräulein, Ihre Grüße haben mich sehr erfreut...“ という書き出しで、2人称も敬称である)。二人が知り合った場所がフィレンツェであることは Ewers 宛ての書簡から明らかなので、<sup>(98)</sup>可能性としては（ハインリヒがフィレンツェに行ったことが明らかになっている）3月末か2月初めかどちらかだが、ハインリヒはあちこち移動する人間で、もし2月初めに知り合ったとすると、最初のイーネスの葉書は8週間を経て相手がフィレンツェにいると知っていて出したことになり、これは考えにくい。むしろ3月末にフィレンツェで知り合って、直後にイーネスがミラノへ行き、そこからすぐに葉書を出したと考えた方が辻褄が合うというのである。

ハインリヒとイーネスの往復書簡集はまだ本になっておらず（ただし Martin が発行人となって出版する計画があるという）、私はまだ現物を読んでいない。だからあくまで Martin の読みによってはあるが、現段階ではこれは説得的な説だと思う。また百歩譲って知り合ったのが2月初めだったとしても、4月初めの二人の書簡がさほど親密な関係を示していないというのだから、イーネスと離れたたくなくてハインリヒがトーマスの結婚式に欠席したという説は成り立ちにくい。

したがって1905年初め頃のハインリヒは、1月末から2月初めにかけてフロー

ベール・エッセイを書いて、厳しい自己対決を行いつつトーマスの結婚式をやりすごし、その1カ月半後の3月末にイーネスと出会ったと考えるのが妥当であろう。

弟の結婚式の1カ月半後に婚約者となる女性と出会う——それは、偶然といえば偶然かも知れない。しかし先にも引いたように、トーマス・マンは『結婚について』というエッセイでヘーゲルを引用しつつ有名な文句を吐いている。《結婚しようという意志があつて、然るのちに愛情が生まれる》と。<sup>(99)</sup>これがトーマスの場合に当てはまるとすれば、弟の結婚の直後に婚約者となる女性とめぐり会ったハインリヒについても、同じことが言えるのではないだろうか。そしてそれはもしかすると、多分に弟の結婚によって触発されたものだったのかも知れないのである。ちなみにハインリヒはイーネスとの関係を、1906年6月に初めてトーマスに打ち明けた。<sup>(100)</sup>彼女と知り合つて1年余りたつてからではあるが、母や親友 Ewers にはさらに2年たつてようやく打ち明けているのだから、<sup>(101)</sup>これよりはるかに早い時期であることに注目すべきであろう。ここに弟への一種の対抗意識を見るのは容易であろう。

ではハインリヒはイーネスと出会つて婚約する頃にどんな結婚観を抱いていたのだろうか。次の長篇小説『種族の狭間で』でこの点を見ておこう。

#### (5) 『種族の狭間で』に見るハインリヒ・マンの結婚観——トーマスの『大公殿下』と比較しつつ

『種族の狭間で Zwischen den Rassen』は、『ウンラート教授』に続くハインリヒ・マンの長篇小説第六作である。執筆には1905年半ばから二年ほどを要し1907年に出版されている。本来1905年までを対象とする本論考の範囲を逸脱するが、その構想は1904年末にさかのぼり、また内容的に見てこの時期のハインリヒの一大転換を考える際には無視できない要素を含んでいる。そこで以下、本論考のテーマに関わる部分に限定してこの長篇小説に触れておきたい。

そして弟トーマスの第二長篇『大公殿下 Königliche Hoheit』も、1906年から三年にわたつて執筆され1909年に出版されており、また邦訳も出ている著名な作品であるから細かく内容に立ち入ることはしないが、構想を得たのが先に述べたとおり妻となるカチアと出会う前後の1903年秋であることを勘案し、

彼が兄ハインリヒをどう見ていたかという問題、そして彼のハインリヒ観と結婚観との関連に限って見ておくことにしたい。

トーマスの『大公殿下』は、小国を統べる王の次男クラウス・ハインリヒが、父の死後兄の代わりに実質的に王位を継ぎ、妃を見つけるまでの物語である。本来は兄で長男のアルブレヒトが世継ぎのはずであったが、兄は虚弱な体質故に、また形式的な仕事をこなす日常に耐えられないことを理由に、弟に王の仕事を委嘱するのである。

この兄アルブレヒトがトーマス・マンから見た兄ハインリヒ・マンの姿を写していることは、比較的分かりやすい。まずアルブレヒトという名である。少し前にトーマスが構想していた『恋人たち』の登場人物の一人、ルネッサンスに熱中するデカダントが、つまりハインリヒ・マンを暗示する人物がこの名であったことを思い出してみたい（本論Ⅷ、(2) a 参照）。アルブレヒトという名は特に貴族に愛好された名であり、<sup>(102)</sup>「賤民」（この単語が兄弟間で何を意味していたかは、前節で触れた）トーマスから見た高踏的な芸術家ハインリヒを暗示するには恰好の名前であったのだろう。ちなみに『トーニオ・クレーガー』には作品を仕上げるために喫茶店に出かけていく作家がトーニオとリザヴェータの会話の中に登場するが、その名はアーダルベルト Adalbert であり、語源的にアルブレヒト Albrecht と同じであることもつけ加えておこう。<sup>(103)</sup>

次にこのアルブレヒトの容姿である。《こめかみが狭く面長の賢そうな顔をしている》<sup>(104)</sup>、《先のとがったブロンドのひげをはやした細面》<sup>(105)</sup>、《青い目》<sup>(106)</sup>などはハインリヒを模したものと考えられる。

そして小さい頃大病をわずらい現在も病弱であること、そのために《彼独特の臆したような気品》があり、《極度に控え目で、内気なあまり冷淡に、無愛想なあまり傲慢に見え》<sup>(107)</sup>、また父王の生前は冬の寒さを避けるために南国に滞在する習慣があったこと<sup>(108)</sup>など、いずれもハインリヒ・マンを彷彿とさせる。

その兄から弟クラウス・ハインリヒは実質的な王の仕事をまかされるのだが、兄の言い分はこうである。

「私は結婚していない。この先結婚する気になるとも思えないんだ。だから子供もできない。」<sup>(109)</sup>

つまり結婚して世継ぎを作ることが王たる者の務めであり、それをするつもりのない自分は王の職務を勤める資格がないとアルブレヒトは言うのである。

またその少し前の場面でアルブレヒトは、国民の人気は私よりお前の方が高い、私は孤独な人間で群衆の歓呼になど興味がない、私は理性でもって人気不人気を超越していると言うのだが、<sup>(110)</sup>このあたりの彼の言辭は、恐らく1903年12月5日のトーマスのハインリヒ批判へのハインリヒ側の反応を下敷きにしてあるものと推測される。この時期のハインリヒ側の書簡が下書き一つを除いて残っていないので実証はできないが、『ブッデンブローク家の人々』が認められて一躍人気作家となった弟へ、兄は恐らくアルブレヒトのこうした言い回しで対応したと見ていだろう。

そしてこの会見の最後にクラウス・ハインリヒは兄にこう言う。

《「僕はいつでも感じていたし分かっていました。あなたの方が僕ら二人の中で貴族的で高いところに立つ人間なのだ、僕はあなたに比べれば賤民 Plebejer に過ぎないと。》<sup>(111)</sup>

繰り返すが、この「賤民 Plebejer」という表現は、前節で触れたように、この時期のマン兄弟の相互関係を表すキーワードであることに留意しておかなくてはならない。

以上のような長男アルブレヒトと次男クラウス・ハインリヒの関係を、1903年から05年にかけての長男ハインリヒ・マンと次男トーマス・マンの関係と比較するなら、『大公殿下』という作品の意味しているところは明らかであろう。次男クラウス・ハインリヒ＝トーマス・マンは、結婚と日常生活という俗世間の職務を、芸術家＝貴族であり俗世間の仕事には興味がない長男アルブレヒト＝ハインリヒ・マンから委託されたのだというトーマス側の論理が、この長篇の下敷きになっているのだ。『大公殿下』は、言うならばトーマス・マン側の結婚の論理を、兄を自分の対極として図式化することによって正当化しようとした作品なのである。

この小説は最初に雑誌に連載されたのちに単行本化されたが、トーマス・マンは雑誌連載を読んでいるという兄に対して、1909年4月1日付けの書簡で、作品に盛り込まれた兄弟関係を文字どおりには受け取ってくれないのではないかと危惧の念を表明している。<sup>(112)</sup>この書簡はハインリヒの婚約者イーネス・シュミートとマン兄弟の上の妹ルーラとの折り合いが悪くなったために出されたも

ので、何であれ兄弟関係を悪化させる要因には神経質になっているトーマスの姿をうかがわせて興味深い、アルブレヒト像が誰を下敷きにしているか、兄が一読すればすぐ分かるだろうとトーマスが考えていたことは明らかである。

また結婚直後に新婚旅行先から出した手紙では、

《兄さんは芸術家以外の何ものでもないのですが、そのせいで私と逆の極端に走っているような気がします。——詩人というものは単なる芸術家以上のものでなくてはならないと思うのです。》<sup>(113)</sup>

と『トーニオ・クレガー』で表明した考え方を繰り返している。結婚し市民的な日常生活を送ろうというトーマス側の論理が、ここでも兄を対極におくやり方で表現されている。

実際、トーマスは結婚以降ナチ政権の成立までミュンヘンに定住したが、ハインリヒはイーネスと知り合ったのちも相変わらず旅行がちであり、『ゾラ』と『臣下』で名を上げたヴァイマル共和国時代はベルリンに居を構えた。1923年のことになるが、母ユーリアが死去した際はトーマスが墓の名義人となっている。<sup>(114)</sup>マン家の精神的な家督相続を次男トーマスが引き受けたということを暗に示す事実と言えよう。

さて、以上で『大公殿下』に表明されたトーマス・マンの論理を一瞥した。しかしこれはあくまでトーマス側の論理である。特にアルブレヒト像は、あくまで自分を規定するためにまずその対極にある者としての兄を描いたという面があった。要するに自分を正当化するために兄をダンに使った訳である。ではハインリヒ側の論理はどうだったか。長篇小説『種族の狭間で』によってこの点を見ておこう。

『種族の狭間で』の構想は1904年末にさかのぼる。1904年12月23日付け Ewers への書簡でハインリヒは《新しい長篇のための材料を集めたい》と書いていて、曖昧な記述ではあるが、FS版 „Zwischen den Rassen“ の Materialien はこれがこの長篇について言及された最初としている。<sup>(115)</sup>また「種族の狭間で zwischen den Rassen」という表現自体は、先にも触れた (IX, (1) b)) ランゲン書店のための自己紹介文中に「二つの種族の間で zwischen zwei Rassen」という言い回しですでに現れており、作品の観念的な構図のようなものは作者の脳裏に少し前から生成しつつあったと見ていいだ

ろう。実際ハインリヒは上述の Ewers 宛て書簡で《精神はすでに出来上がっているのだが、現実が欠けている。実際的な事実がだ》と述べている。作品の観念構図はできていてもそこに肉付けするための材料探しに苦勞しているという意味であろう。

執筆開始は1905年7月、出版は1907年春であった。<sup>(116)</sup>

「二つの種族の間で」というテーマはハインリヒ自身の生き方と密接に関わっている。若い時から旅行好きで特にイタリアを好んだ彼は、執筆を開始して間もない時期に Ewers に宛てた手紙で、《私が例外的な存在となっているのは、二つの国の間を行ったり来たりし、双方の文化からそれぞれ影響を受け、どちらか一方に完全に所属しているとは言えないからなのだ》と述べている。<sup>(117)</sup>

このテーマは作中、まずヒロイン・ローラの生い立ちに反映されている。南米に移住したドイツ人の娘であるローラが幼くして父にドイツに送られ、様々な過程を経て成長してゆくというのがこの長篇の筋書きだが、ローラは多分にイーネス・シュミートの面影をとどめている。イーネス自身南米に育ったドイツ人であり、ヒロインのモデルとなるにうってつけの経歴の主であった。

さらに、ローラの幼年期の描写には、マン兄弟の母ユーリアが自らの幼少期を綴ったメモワールが利用されている。ユーリアもまた南米に移住したドイツ人の娘であり、経歴がイーネスと似ていたのである。<sup>(118)</sup>ハインリヒがイーネスに惹かれたのは、単に彼女個人の魅力のためだけではなくたのかも知れないのである。

また、この長篇にはローラの相手役としてアルノルト・アクトンというドイツ青年が登場する。彼の姿と作者ハインリヒは多分に重なり合っている。アルノルトは若くしてイタリアに旅して圧倒的な感銘を受け、かの地で七年間を過ごし創作に打ち込んだが、やがてそれも終わりになって、イタリアに何の魅力も感じられなくなってしまう。彼は内的な共同体への憧れを感じて故郷ドイツに戻る。しかし周囲の人間とうまく付き合うことができない。一人暮らしが長すぎたので、他人と一緒にいても異境にいるかのように感じるのだ。<sup>(119)</sup>

彼は政治的意識についてローラに話す。人間性や精神を重要視しなくてはいけない、と言いつつルソーを引用し、自分は新しい国の市民になりたい、1789年以来人間にはアルカディアが可能になったのだ、と力説する。<sup>(120)</sup>

どういふ女性なら自分に合うかという話題も出る。<sup>(121)</sup>アルノルトは言う。ド

イツでは解放されたばかりの女性によく会ったが、彼女らはまだ荒っぽくて趣味がよくない。一方、これと対極的なのがイタリア女で、よく私を誘惑したものだ。彼女らはチャーミングで、知り合って半年とたたないうちに彼女らと結婚する男の気持ちも分かるが、後年そういう男は相手の目に空虚さを見いだして後悔するだろう。永遠の未成年のような女、モラルの繊細さという私のドイツ的遺産を軽蔑するような女を、私はそばにおくことはできない。

あなたは精神を持った美人を望んでいらっしゃるのね、難しいわと言うローラに、アルノルトはこう答える。混血女性と何人か近づきになった経験があるが、彼女らは自分を作った種族の一方だけを肯定し、他方を否定していた。私はそうでない混血女性を想像する。体も精神も古くて強靱な文化に満ち、エレガントで趣味のよい女性を。そういう女性は私に似ている。なぜなら私も種族の狭間におかれた人間だから。

こんなアルノルトにローラは惹かれながらも、結局は美男のイタリア人パルディ伯爵と結婚する。そして官能の喜びを味わうのだが、ほどなく夫の欠点が目につき始める。金持ちのようでありながらも、吝嗇で、賭博好きで、何かと妻を拘束しようとするパルディ。男らしいとはいっても野獣のごとき男らしさの権化がパルディなのだ。ローラはやがて夫の身勝手に愛想をつかし、アルノルトと再会して一緒に暮らすようになる。アルノルトと真に結ばれるまでには彼女の方もパルディを介して自分なりにイタリア体験を積み重ねてきたことになる。最後にパルディの行為に憤激したアルノルトが彼と決闘しようとするところで小説は終わる。内気で思索型の青年だったアルノルトが、決闘によって行為の人間に転じていく様が暗示されているのだ。

ここにはまた、かつての『女神たち』のような、ニーチェ流の「金髪の野獣」讚美（パルディは金髪の野獣の一種である）から、ルソー流の社会変革讚美への言わばパラダイム変換が見て取れる。アルノルトがローラにルソーやフランス革命の意義を力説する場面があることは上述のとおりだが、その直前には作中人物の一人ティニが「善悪の彼岸」や「支配者の道徳 Herrenmoral」といった言葉を口にするシーンがある。<sup>(122)</sup>言うならば、著者がその分身である作中人物に思想を披瀝させる前座として、別の人物を介してニーチェ主義を登場させているのであって、この前座の後に来るアルノルトの言葉が暗にニーチェ主義を批判する形になっているのである。ここは、著者ハインリヒ・マンがおのれ



の思想遍歴を表した箇所と見ていだろう。

また、アルノルトの生き方は『女神たち』や『ピッポ・スパーノ』に見られた芸術家像の革新を狙ったものでもある。これらの作品では芸術家は、すぐれた作品を生みだしはしても社会的には無能で、強い生命力を持つ人間に翻弄される存在でしかなかった。それがこの『種族の狭間で』にあっては、アルノルト＝芸術家＝知識人は、社会のあるべき姿をフランス革命やルソーによって理念化し、その実現のために努力する有用な人間として、高邁な役割が付与されているのである。

以上のような『種族の狭間で』の内容を見るなら、『ギュスターヴ・フローベールとジョルジュ・サンド』で語られたハイน์リヒ自身の経歴と以後進むべき新しい道が、小説の形で肉化されているのは明らかであろう。ドイツ人でありながら南米に育ったローラ＝イーネスは、ドイツ人でありながら一時期イタリアに心酔し北方的なものと同方的なものとの統合をめざす（その結果としての思想的基盤がルソー＝フランス革命となる）アルノルト＝ハイน์リヒ・マンにとって理想的な女性として現れるのである。「種族の狭間で」というテーマが、文字通り肉体の上でも理念の上でも、アルノルトとローラという男女の結びつきにおいて実現される、この長篇小説はそうした理想を語った作品なのである。そしてトーマスの『大公殿下』と比べてみる時、ハイน์リヒにとってこの小説が自分の生き方との関連でどれほど切実な作品であったかは、言を俟たない。トーマスが妻となったカチアとの交際・結婚を土台に『大公殿下』を書いたように、ハイน์リヒは、（結局は結婚には至らなかったが）婚約者となったイーネスをヒロインのモデルとしながら、ほぼ同時期に進行したおのれの思想的転換を『種族の狭間で』に刻み込んだのであった。<sup>(123)</sup>

## X. 結 語

ハイน์リヒとトーマスのマン兄弟は、こうして1903年から1905年にかけて様々な葛藤を経験し、確執や対立を重ねながら青年期を終えた。この時期に二人を襲った危機は、若く自由なボヘミアン時代から充実した仕事をする円熟した年代への転換期そのものに他ならず、二人の対立も新しい段階の生みの苦しみであったと言えるだろう。「文学」や「芸術」の自立的な価値を信じ続けること、

その信念によってのみ生き続けることは誰にとっても難しい。この問題に何らかの形で決着をつけ新しい道を選択する作業は、青春期の終わりには必然的にやってこなくてはならなかったのである。

それまでの自分を対象化して自己対決を行い、妻もしくは婚約者となる女性と出会って人生の新しい段階に進んでいった二人の姿には共通する部分も多い。しかし同時に二人の選んだ道の相違点も看過する訳にはいかない。

トーマスにあっては否定の対象は「芸術家」であって、芸術そのものではなかった。トーニオ・クレーガーは、月並みな市民を見下し冷然と構える芸術家よりは普通の市民を愛するとしながらも、誰にでも分かる芸術をめざすなどとは言わない。トーマス・マン自身も、カチアとの結婚生活という安定した地盤を得て（別の言い方をすれば「厳しい幸福」<sup>(1)</sup>に耐える日常を送りつつ）、すぐれた文学作品を書こうと模索する。「あれもこれも」がトーマスの基本的な思考法なのだ。

しかしトーマスは「厳しい幸福」に復讐されはしなかつただろうか。日々の平凡な暮らしの中ですぐれた作品を書く——言うはやすく行うは難い。彼が処女長篇『ブッデンブローク家の人々』と肩を並べる長篇を書き得たのはようやく『魔の山』になってからであり、両長篇の間には四半世紀という時間が経過しなくてはならなかった。そして『魔の山』以降の作品群は、戦争・政治的混乱・亡命という非日常の中で書き継がれていった。

それに対してハインリヒは、トーマスとは違って長い間家庭に安定した地盤を持つことがなかった。「婚約者」となったイーネスとは数年後に別れ、1914年に女優マリア・カノヴァと結婚して一女をもうけるが約十五年後に別れ、その後28歳年下の通称ネリー・クレーガー<sup>(2)</sup>と再婚するが亡命先のアメリカで自殺されてしまう。運不運もあろうが、結局ここに絡んでくるのはハインリヒの女の好みの問題であろう。彼は生涯、安定した家庭を作るような女性と一緒にすることがなかった。Wysling が指摘したように、交際相手は「女優か娼婦、或いはその双方を兼ねた」女性だったのである。<sup>(3)</sup>

しかし「知識人」として共和制や民主主義に加担してゆく道を選んだハインリヒは、その作品に「社会のためになる」という明確な方向性を持つことになった。トーマスが家庭によって一種の安定を得たとするなら、ハインリヒはその文学観によって安定を得たのだった。ハインリヒにあってはおのれの芸術家と

しての性格とともに生み出すべき芸術の性格も一大転換をきたした。その基盤をなしたのは彼の二元論的な思考法である（本論Ⅴの最後を参照）。芸術のための芸術か、社会のための芸術かという二者択一は、彼が以前から有していた二元論的思考法の帰結だったと言えよう。

だがここにもそれなりの問題があった。トーマスが安定した家庭生活故に作品制作に困難をきたしながらも、同時に作品に一種の純粹さを保ち得たのに対し、ハインリヒは「社会性」を唱えたがためにその作品の性格を限定される危険性にさらされた。彼が一定の政治的プログラムに従って小説を書くだけの作家であったなら、むしろ「文学の社会性」は簡単な作業だったろう。だが彼の資質は果たしてそんな風にできていただろうか。やがて彼は『臣下』や『ゾラ』によって弟に劣らぬ名声を獲得するが、そうすると逆に、政治性によってのみ価値を計られる風潮に彼自身が異議を唱えるようになる。<sup>(4)</sup>彼は芸術そのものの価値に未練を残していたのだ。

ここにはまた別の側面もある。トーマスが結婚によって得た安定は何よりも市民としての家庭生活に立脚していたから、彼は以後ふだんの暮らしから生まれる日常的な視点を手放すことがなかった。それは言い換えれば、自分の生きるドイツの現実を丸ごと否定することはしないという或る種の保守主義である。一方ハインリヒは文学の社会性を唱えつつ、芸術の無意味さに背を向けることによって安定を得た。それは、おのれの身の回りの平凡さに耐え日常のあるがままを肯定する生き方とは正反対の方向性であった。「知識人」としてフランスやその共和制に加担しドイツの帝政を撃つ進歩主義的姿勢は、その必然的な結果である。

約十年後、二人は第一次大戦に際して本格的な兄弟喧嘩をすることになるが、それはすでにこの青春時代への訣別の仕方そのものに胚胎していたのであった。

(完)

## 註

## IX.

- (95) THBW, S.364
- (96) Mendelssohn, a.a.O. S.628
- (97) Ariane Martin: Erotische Politik. Heinrich Manns erzählerisches Frühwerk. Würzburg (Königshausen & Neumann) 1993 S.213
- (98) H. Mann: Briefe an Ewers. S.440
- (99) X, S.201
- (100) THBW, S.78f.
- (101) 母に関しては THBW, S.364, Ewers については Briefe an Ewers, S.440
- (102) Vgl. Lexikon der Vornamen. 2.Auflage. Dudenverlag. Mannheim 1974
- (103) Ibid.
- (104) II, S.53
- (105) II, S.158 Vgl. Mendelssohn, S.798
- (106) II, S.347
- (107) Ibid.
- (108) II, S.89f. 142
- (109) II, S.156
- (110) II, S.145f.
- (111) II, S.158
- (112) THBW, S.97
- (113) THBW, S.58
- (114) Viktor Mann: Wir waren fünf. Bildnis der Familie Mann. 1949 S.493  
邦訳: ヴィクトル・マン『マン家の肖像』(拙訳, 東京(同学社), 1992年, 382  
ページ。
- (115) H. Mann: Zwischen den Rassen. (FS) S.487
- (116) 執筆過程については „Zwischen den Rassen“ (GW) S.431ff.を参照。
- (117) H. Mann: Briefe an Ewers. S.415
- (118) なお母ユーリアのメモワールは彼女の生前は出版されず, 1923年に彼女が死去したのちはマン兄弟の末弟ヴィクトルが, さらにヴィクトルが1949年に死去してからはヴィクトル夫人ネリーが生原稿を保管し, 1958年によりやく『ドードの幼少期の思い出 Erinnerungen aus Dodos Kindheit』(ドードはユーリアの幼少期の愛称)のタイトルで出版された。その後1991年になって Aufbau 書店から書簡類と合わせた形で改めて出版された。このメモワールそのものの邦訳はないが, ヴィクトル・マンのメモワール „Wir waren fünf. Bildnis der Familie Mann“ (上註114参照)によりある程度内容を知ることができる。

(119) H. Mann: Zwischen den Rassen. (FS) S.161ff.

(120) Ibid. S.152ff.

(121) Ibid. S.168ff.

(122) Ibid. S.152

(123) しかし、そうしたハインリヒの思想的展開や個人史との関わりと、作品としての出来ばえとは、言うまでもなく別問題である。『大公殿下』がトーマスの長篇小説の中では決して高い評価を与えられていないように、ハインリヒの『種族の狭間で』も、作者が作中にこめたものとそれが読者に与える印象との間には齟齬があったようだ。それは、この作品を作者の側から読んだ人間の感想と純粋な読者の側から読んだ人間の感想とを比較してみると明瞭になる。

作者の側に身をおいて読んだ場合の代表例にはトーマスを挙げるができる。彼は1907年6月7日付けの兄宛て書簡でこう述べている。

《理解していただけるでしょうが、私はこの作品を主に、個人的なドキュメントにして告白として読んだのでした。(…)『種族の狭間で』は——少なくとも現時点では——兄さんの作品中で最も好ましく親しみを持てるものです。なぜでしょうか？ 第一に、先ほど書いたように、告白だからです。これほど熱意をこめた作品は初めてですね。そしてこの本は、美しさの中に厳しさを秘めているにもかかわらず、著者の熱意によって柔和さや人間らしさや慎ましい帰依といったものを獲得していて、そのために私は読んでいて抗しがたい感動に捕われることしばしでした。しかし、作品の本当の魅力はもっと深いところに存しているのかも知れません。思うにその魅力は、この本が今まで兄さんが書いた中でも最も公正で最も熟達し最も穏当で最も自由な作品だからでしょう。ここには傾向性や偏狭さはなく、何かを美化したり嘲笑したりするところもありません。何かを勝ち誇ったり軽蔑したりするところもありません。精神やモラルや美学の領域で党派性に走るところもありません。ここにあるのは全方向に開かれた姿勢であり、認識と芸術の融合です。こうした成果は素材に負うところ大である訳ですが、素材とは他ならぬ兄さんなのですから。》(THBW, S.81f.)

『愛の狩猟』での苦い経験からか、トーマスの筆致は評価という点ではやや過褒の気があるが、作品の告白的性格を重視し、兄自身が「素材」であるからこそ素晴らしい作品になったのだとする見解は、『種族の狭間で』という小説の核心を突いたものと言えるだろう。

一方、マン兄弟の下の妹カルラは、ハインリヒに次のような読後感を書き送っている。

《ローラ(…)は素敵です。(…)アルノルトには私はほとんど共感を持ってません。パルディに比べても持てないのです。ローラは作中でこの二人を愛しますが、両方とも愛さなくてもよかったのでは。》(H. Mann: Zwischen den

Rassen. [GW] S.451, [FS] S.514)

肉親愛を越える感情を抱いていた美しい妹に、おのれの思想的遍歴をそそぎ込んだ作中人物をこんな具合に酷評されたのでは、ハインリヒとしても立つ瀬がなかっただろう。カルラは知人宛ての書簡でも次のように書いている。

《『種族の狭間で』は、若干の箇所を除いては余り好きではありません。特に不愉快なのがアルノルトです。私がローラの立場だったらきっとアルノルトもバルディも愛さないでしょう。ハインリヒにも手紙でそう書きました。でも兄の返事は、そうなったら小説が成り立たなくなるということでした。確かにそのとおりなので、沈黙せざるを得なくなってしまうのです。》(H. Mann: Zwischen den Rassen. [GW] S.451f., [FS] S.516)

カルラもアルノルトの描写に兄の影が射していることを全く知らなかった訳ではなかろうが、あくまで読者として、ヒロインに感情移入してこの小説を読み、ヒロインの相手役になる男性二人をいずれも魅力がないとする彼女の見解は、作品の告白的要素が小説としての出来ばえにうまく寄与しなかった事情を物語っているように思われる。

## X.

- (1) 『大公殿下』の末尾参照。
- (2) ハインリヒ・マンの二度目の妻とその名前については、山口裕『ハインリヒ・マンの文学』(東京〔東洋出版社〕, 1993年)の第6章に詳しい。
- (3) THBW, S.XL
- (4) André Banuls: Heinrich Mann. S.7

## 補 足

前回(連載第7回)の註(62)でハインリヒの作品に登場するジプシー・モチーフに言及したが、その際、『愛の狩猟』に現れるジプシー・モチーフには触れることができなかった。これは紀要の枚数制限のためであったが、今回は掲載分量が比較的少なく、また連載第3回の本論Ⅳ(1)で、『愛の狩猟』に現れた「芸術家=ジプシー」という図式には後で触れると予告しておいたことでもあるので、ここで補足的に紹介しておきたい。

『愛の狩猟』のジプシー・モチーフは第8章に登場する。

クロードは、田舎劇団の公演を終えてミュンヘンに帰ってきたウーテと再会し、二人はミュンヘン郊外の Walchen 湖畔に保養に出かける。そこにミュンヘンでのクロードの取りまきが多数押しかけてくる。その日、彼らの乗った馬車が傾斜を駆け降りていく途中、危うく緑の馬車に追突しそうになる。それはジプシー芸人の家族が乗った馬車だった。彼らを怒鳴りつけるパニーア。クロードが、なぜ村で上演しないのと

訊くと、村長に禁止されたのでという答が返ってくる。双方の馬車が離れていく間、ジプシーの娘二人をじっと見つめるウーテ。

宿屋に着いて食事の注文をしている間に、さきほどの緑の馬車がやってくる。そしてヴェランダの客たちを前にして綱渡りや踊りの芸を披露する。(街道から街道へとへめぐる生活によって、ジプシーの娘たちは花開く前に枯れしぼんでしまうという描写もある。) 上演が終わって客の間を金集めに回る少女二人。客の様々な反応。パニーアは少女の小銭皿を乱暴に叩いたのでコインが飛び散ってしまう。金をやって出身地を訊くクロード。

ウーテはパニーアに、「あなたはあの人たちよりましな存在だと自分を思っているのですか、それは思い違いですよ」と言う。驚く取りまきにウーテは「私だって劇場にいたんですからね」と言い、芸人や劇人の生活の方が、普通の俗っぽい市民の生活より生きているというに値するのだと弁じた。そして見物人の俗物に比べたらあの二人の少女は……と言いよむウーテの言葉を引き取って、クロードが「王女様だね」と結ぶ。

金を集めて戻ってきた少女たちに皿の中身を尋ねたマッドハッカーは、その少なさを見て取って、あなたならいくらで綱渡りをしますかとウーテに訊く。それを受けてウーテは綱渡りをし、ジプシーの少女から皿をひったくって客の間を回り金を集める。当惑しながらも金を出す客たち。パニーアやマッドハッカーも入れる。クロードも再度入れようとするが、ウーテはそれを拒んで、あなたはこちらの一員だから、と言う。クロードは考え込む。(GW, S.200ff. CL, S.258ff.)

以上、劇人・芸術家と普通の俗物市民を対置させ、ジプシーを前者の一員と見て共感を寄せるウーテの姿勢が、図式的と言えるほど明白に現れる箇所であり、やや通俗的な匂いがないでもないが、舞台や映画にすると映えそうなシーンである。